

ラオスのこども通信 26号

(2002年9月発行)



ASPB の出版作品

【ASPB20周年】出版——子どもの本の作り手を育てる歩み

20年前の1982年、ASPBは絵本を送るという身近にできることから始め、その活動が会の名前となりました。1975年まで続いたベトナム戦争でアメリカはラオスに9年間に渡って大量の爆弾を投下し、その被害からの復興と難民流出の時代でした。その後、90年代に入り、ASPBは絵本の専門家や多くの仲間とともに「絵本の作り手を育てる」活動に力を注ぎ、これまで84作品、約40万部を出版してきました。

■ 80年代は「送る」、

90年代からは「作る」「活かす」

初期の活動は、日本で絵本を集めてラオスの小学校に持っていくという活動でした。教科書が

先生用しかないという状態で（現在、生徒への普及が続けられている）、せめて絵だけでも本に親しんでもらおうとしたのです。しかし、「送る」だけでは何も生み出されません。90年代に

は「作る」「活かす」へと広がっていきます。

ASPBの出版の歩みを語る前に、ラオスの出版事情を知る手がかりとなるデータを紹介します。1年間にどのくらいの出版物がラオス国内で出されているのか。1999～2000年の1年間で、一般向け57点、雑誌3点、児童書22点、教科書20点です(出版許可局による出版許可統計)。出版物があふれ返る日本では想像しにくい数かもしれない。読み手も作り手も非常に少ないのが現状です。そうした中で児童書の点数が多いのは、NGOなどによる取り組みからです。

ASPBの活動は、1990年の国際識字年を機に「ラオス語の本」作りに向かいます。92年からはラオス政府の国家事業である全国の小学校への「図書箱」配布に協力を開始。この活動を通じてASPBは「図書箱を作っても、入れる本がない」「本を学校に置いても、先生が本好きにならないと眠ったままになる」ことを痛感しました。

■セミナーを続け、作り手を育成

本づくりでのASPBの人材育成は、95年に日本の絵本の専門家を講師にラオスで開催した「絵本・紙芝居セミナー」に始まります。

「子どもが初めて出会う絵本は、お母さんが愛情を込めて話しかけるように」という、わかやまけんさんのメッセージとともに、参加者(絵心のある人、幼稚園・小中学校の先生、美術学校の学生など)は、動物をテーマにした詩につける絵を描いていきました。絵の具を初めて使った人も少なくなく、切り絵にも挑戦。動物の絵を見ながらラオス文字が学べる『文字絵本1・2』、果物の絵で数を覚える『数字絵本』を合作し、出版しました。

その後もASPBは絵本、紙芝居、読み聞かせなどの専門家の方々とつながりを広げ、セミナーを続けてきました。

一方で、「絵本への疑問」も出されました。本に

は親しんでこなかったが、豊かな「語り」の文化を受け継ぐ人々に、絵本という様式を短期訓練することが適正なのか。語り手と聞き手が一体となれる「紙芝居」に重点を置いてはどうか、と。そうした中で、ラオスの人々による紙芝居3作品を、ラオス語と日本語の2言語表記にして日本の汐文社より出版しました。

様々な試みをしながら、しかし厳しい資金の中で、誰にどう働きかけることが効果をもたらすのか、などの議論も繰り返してきました。大人なのか、それとも時間はかかるが感性の豊かな子どもなのか、手探りと試行錯誤をしながら、絵本、紙芝居の出版を続けてきました。

■民話絵本コンクールで発掘

「作り手の裾野を広げよう」と、発掘と育成をめざして、2000年に「民話絵本コンクール」を実施しました。

「あなたの村の民話を絵本にしませんか」の呼びかけに、各地から28作品が寄せられ、ラオスの作家が内容から、日本の絵本の専門家が絵本としての出来上がりから審査しました。子どもの本のあり方を巡って、ラオス人は「正しい教えがなければ」と主張し、日本人は「楽しいことがなにより」と違いが現れつつ、3作品の出版を決定。絵本として魅力的にするために、ラオス人作家が文章表現を、日本の編集者がページ展開や絵の構図などの添削指導を繰り返し、このほどようやく3作品とも完成しました。

これまでにASPBが出版してきた84作品には、絵本だけではありません。辞書や一般の大人向けの書籍、そしてかつて出版された本の再版も多く手がけてきました。

再版作品の一つが、今年出版した『孤児と歌うキツネ』です。再版ならば、短時間で出来上がるかというところとはいきません。印刷所に原版が残っているわけではないので、最初から作ること

になります。イラストは新規に描き起こします。今年のもう一冊の新刊、『ぼくを捨てないで～楽しいリサイクル工作』は、リサイクルに目を向けるという新しいタイプの作品です。

さて、本作りは作家だけでなく、編集者の育成が欠かせません。しかし、ある意味では作家の育成よりも難しく、時間もかかります。ASPBのラオス事務所では編集員会を設け、作品を見る目を養い、作家に適切なアドバイスをする力の向上をめざしています。

● 民話絵本 3 作品

『シナーとユー～ルアンパン地方のモン族の民話』
文と絵 ヴァンマイ 5000部



シナーとユーは2人姉妹。山道が大きな石でふさがれて困っていると、蛇が片付けてくれて、どちらかに嫁になって欲しいと言う。姉はいやがり、妹が結婚する。ある朝、蛇は美しい若者に変身。すると、姉は妬むようになり、妹を井戸や谷に突き落とす。ところが、妹は蛇の王子である夫の力で、いつも無事に帰ってくる。姉も妹のまねをして蛇と結婚するが、飲み込まれ、あわやというところで妹夫婦に助けられて改心する。

『トゥーノイヤー～モン族の民話』

文 ウッタイ ソンチャルーン 絵 ヴッティ シリポーン 5000部



若くして父と母を亡くした貧しいトゥーノイヤー少年。つらい日々を送るが、親の遺言に従って寝床の下を掘ると馬、弓、ケーン（楽器）が出てくる。祭りの日、王様は人々に馬、弓、ケーンの技を競わせ、優勝者に国を継がせると告げた。トゥーノイヤーも出場し、見事、優勝を果たす。

『孤児と魔法のドラ～ヴィエンチャンはどうやってできたか』
文 テップヌハック 絵 ヴォンサヴァン ダムロンスック 8600部



寺で働く孤児は野菜を育てるように言われるが、水をやるのに面倒がっておしっこをかける。ある日、お姫様が寺を訪れ、それを食べて城に帰る。やがてお姫様に赤ちゃんが誕生。父親探しが始まる。赤ん坊は、寺の孤児に向かってはいはいをした。怒った王様は、姫と子と孤児を追放。3人は筏に乗って川を下る。島に着き、そこにドラを持ったサルが現れる。孤児がドラを叩くと村と村人が現れ、さらに宮殿が出現。3人は家来を連れて王様に謁見し、許される。ヴィエンチャンができた由来を伝えるお話。

ASPBが本づくりで考えている、もう一つのことは、書店の運営です。

現在手がけているのは、図書室に置かれる公共物としての本の提供のみです。しかし、本は、欲しいと思う人が、欲しいと思う本を自分の手元に置き、大切に読むという姿があるはずで、それによって出版事業が外国の資金に頼ることなくラオスで自立することが、あるべきかたちだろうとASPBは考えているからです。現在、計画中ですが、まだ実現には至っていません。

● 再版

『孤児と歌うキツネ』

文 ドウアンドウアン プンヤヴォン

絵 ヴォンサヴァン ダムロンスック 6475部



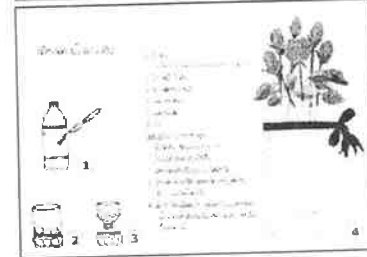
『孤児と歌うキツネ』は、ラオスに伝わる昔話。キツネが正直者の孤児を助けてくれるという、日本の「花さかじいさん」と似ているお話です。

● 創作絵本

『ぼくを捨てないで～楽しいリサイクル工作』

文 カンカーブ カンタマスヴァン

絵 セーングン ブッダラー 5000部



『ぼくを捨てないで』は使い終わったプラスチック容器を使って花瓶やおもちゃを作ろうという内容。ラオスの小学校を訪れると、教室にプラスチック容器でつくった魚が飾られているのに出会うことがあります。楽しいイラストで、子どもたちに工作の楽しさとリサイクルを呼びかけます。

『孤児と～』はカナダ・ファンド、生活クラブ生活協同組合の草の根市民基金より、『ぼくを～』はカナダ・ファンドより支援をいただいています。

ASPB ラオスの子どもに絵本を送る会 の始まり

チャンタソン インタヴォン

1975年の社会主義革命後、ラオス政府は、より多くの子どもに初等教育の機会を提供するため、それまでのフランス式教育制度 6-4-3制を5-3-3制に変え、同時に、幼稚園から大学までの教育を、フランス語から一気にラオス語化した。それは植民地時代以来の教育革命であった。これらの急激な変革のため、多くの人々が難民として、メコン河を渡って対岸のタイへ行った。

母国語での教育は独立国家としては当たり前だが、一世紀近くも慣れ親しんだフランス式教育がなくなると、子どもの教育の質が下がるのではと心配する親がいっぱいいた。現実問題、急速なラオス語化のため、ラオス語の専門書や教科書もほとんどなく、先生方は、外国語の本を翻訳しながら、教えるしかなかった。

夫と義母を連れて初めてラオスに帰国した1979年は、実家に夫達を泊めるには、村、町と市の許可が必要なほど、規則が大変厳しかった。

ヴィエンチャンの町にあるのは、国営の本屋さん一軒のみで、売っていた本のほとんどは、ロシアやベトナムのものだった。図書館といえば国中で一つしかなかった。

その2年後、2歳に満たない娘を連れて里帰りした。娘と近所の小学校へ遊びに行くと、小学校の薄暗い教室で、先生は赤ちゃんを抱えながら、色あせた黒板に教科書を写し、教科書を持たない子ども達は、それをノートに一生懸命に写している。勿論教

室には本棚も、他の本もなかった。

娘より大きい子が、たどたどしく文字を読んで見たのを見てショックを受けた。娘はまだ2歳未満だが、毎日楽しみに読んで貰った本を、すらすらと読むのだ。それを見て、一人の母親として、娘が体験した本を読む楽しさを何とかラオスの子ども達にも分けてあげたいと思った。

日本へ戻ると、毎日のように、タイの難民キャンプで活動している国際機関や世界中のNGOが競って援助をしているニュースが映されていた。難民だったら第三国へ、タダで行けると知ってか知らずか、政治的な迫害を受けない農民まで、難民として続々と川を渡った時期でもあった。

そのニュースを見るたびに、どうして難民を出さない活動を、国際機関やNGOはしないのかと疑問を持った。そして人々が自国に留まるには、やはり国内の安全や、教育などの環境整備が必要だと思うようになった。

私は教育学を学んでいたので、出来るなら子どもの教育環境整備に関わりたいという気持ちを以前から持っていた。

ちょうどその頃、近所の保育園のバザーで、いっぱい売れ残った絵本を見て、とっさにそれを貰い受け、ラオスに送りたいと知人に話したところ、皆が共感してくれ、ラオスに送る費用を寄付してくれたのが、「ラオスの子どもに絵本を送る会」の始まりだった。1982年のことだ。

NPO 法人化に向けて

ASPBは、現在、NPO法人（特定非営利活動法人）となるべく、作業を進めています。今日、日本の社会では多くのNGO（人々が自発的に取り組む国際協力活動の団体）が、こうした流れにあります。

ASPBは、これまで、自分たちは従来から透明性の高い会計を行ってきたという自負から、お上のお墨付きなど必要なしと考えてきました。しかし、世の中に「法人化されていない団体は対象外」という空気が生じる気配もあり、「うちは中味で勝負だ」と威張るにはASPBは体力があまりに弱く、法人化する決断をしました。

これを機に、組織運営の整備を図っていくべく、9月22日には、スタッフとボランティアで、ASPBがめざす方向と組織のあり方を検討しました。

< NPO 法人設立の総会のご案内 >

ASPBのNPO法人化を応援して下さる方の参加を呼びかけます。

日時：2002年12月7日（土）13：30～

場所：ライフコミュニティ西馬込

*参加をご希望の方は事務局までご連絡ください。

Tel：03-3755-1603



ポンサーリーのあたらしい道

ラオス最北部のポンサーリー県に新しい道ができました。アヘンの栽培から商品作物への転作を支援するアメリカのプロジェクトで、今後この道沿いの村々では、伝統的な焼畑農業から科学技術を使った定住型の農業へと移行していくとのことです。標高1000m以上の山々の尾根が連なるこの地域には、言葉・文化の異なる様々な民族が暮らしています。

この道を車で3時間、その後歩いて3時間の所にあるブーノイ族の友達の村に、友人たちと行きました。雨で道が悪く乗り合いトラックが故障してしまったため、村に到着したのは夜9時頃になってしまいました。

はじめは楽しかった山歩きですが、陽が沈んだ後は大変でした。一休みした後荷物を持ち上げた瞬間、靴の持ち手が切れて

しまったのです。周囲はだんだん暗くなっていき、小さな懐中電灯を友人に持ってもらいましたが、暗くて全然見えません。両手がふさがっている私は、滑ったり水たまりにはまったりして全身泥だらけで、やっと村の明かりがみえた頃には、斜面を滑り、荷物を引きずっていました。

友達の家に到着すると両親やたくさんの弟や妹、そして1歳の友達の娘に迎えられました。「ここは私の家だから何にも恐いことはないよ。何でも食べて自由に過ごしてね」と言ってくれた友達のことは通り、私は山の幸をたくさん食べ、訪ねてきた人たちと話して過ごしました。電気はなくてもランプの明かりで十分に明るく、夜は人々が明かりの下に集まって過ごします。この村には山の空気と同じく純粋で、汚れたものなんて一つも

ないようでした。実家に里帰りしていた友達と娘が村で過ごす最後の夜、一番末の妹がご馳走に手をつけず一晩中泣いていたのが忘れられません。

帰りの道は本当に良く晴れていました。気が遠くなるくらい遠くの山の頂上に村が見え、目の前の斜面には陸稲が美しく育っています。そんな光景を見ると幸せなほっとしたような気持ちになりました。

何十年、何百年間もこの山々で生きて来た人々の生活は今、新しい道ができて大きく変化しようとしています。新しい文化、文明によって教育のレベルが上がり、人々の生活、未来が豊かになることを望みます。そして清らかで優しい人々の心、自然や文化がいつまでも受け継がれていきますように心から願っています。(野田幸枝)

ASPB ヴィエンチャンCCCの子どもたち

ある日曜日、事務室の横からキーボードの音が聞こえてきた。「あれ、音楽の時間は終わったはずなのに」と不思議に思って見に行くと、先生のいないすきに、男の子3人が弾いて遊んでいた。

中学生になったばかりの彼らは、毎週土日 ASPB の CCC で1日を過ごす常連だ。初めはちょっとドキッとした顔を見せたが、相手が私とわかると「この曲知ってる？」と弾いたり、自動演奏を聴かせたりした。キーボードを勝手に使用しているこ

とについては、片目をつぶり、おしゃべりしてみた。

ソムマラー君 12歳

絵を描くのが大好き。いつも講座の始まる前から、好きな絵を描いている。その日も、前に見た紙芝居の場面を思い出しながら、クレヨンで迫力ある龍の絵を描いていた。

「家はどこ？」

「サーカス小屋の向こうの方。自転車で45分ぐらいかな。お父さんはいないけど、お母さんがお店をやってて、兄さん姉さんが手伝ってる」

ソンパティップ君 13歳

踊りや歌が大好き。

「どうしてここに来るようになったの？」

「ヴァンタナーに教えてもらった。家が近いから、自転車で一緒に来てるんだよ。」

とそこで、踊りの音楽が聞こえてきたとたん、話もそこそこに、1階に飛んでいってしまった。

ヴァンタナー君 11歳

ここに通うようになって4年になる。小学校2年だったやんちゃ坊主も中学生になった。

「どの講座が好き？」

「うーん、歌かな」

でも、粘土細工をする時に、彼のいたずらそうな目が輝くことも、私は知っている。(赤井朱子)



タイ、フィリピンのNGOからの刺激。

森 透

子どもが参加する子ども支援の活動や、国境をまたぐ子どもの人身売買・売春に取り組むネットワークなど、子どもの問題に取り組むタイ、フィリピンのNGOを、この夏訪問しました。

■子どもが「担い手」、意思決定者となる

ASPBは出版・図書室・CCC(子ども文化センター)を通じ、子どもが世界を広げ、自分を表現する機会を獲得するための支援をしてきました。こうした活動に子どもがどういう関わり方をしているのか、今回、改めて考えました。

ストリート・チルドレンに同じ年ごろの子どもが声をかけて相談にのる(フィリピン、TATAG)。スタッフの仕事ぶりを子どもたちが評価する(タイ、子どもの村学園)といった、子どもが「サービスの受け手」に留まらない取り組み。

フィリピンのルンデュヤンは、街頭での演劇を通じて、子どもが人間らしく生きるための訴えかけをし、子どもや大人と対話する活動をしています。ここでは、子どもは演技手であり、様々な場で演じながら新しいものを取り入れていく演出家でもあります。理事会には18歳の子たちも大人の理事とともに活動の意思決定に加わります。若い理事は、お飾りとしてでなく、理事のすべき仕事を十分に理解した上で就任し、大人の理事は、分かり易い言葉を遣い、若者の理解を確かめながら議事を進めなければならないとしています。訪問時、残念ながらその会議の様子を見学していないので、実際にどのように行われているかは確かめていませんが、その姿勢は参考になりました。

「子どもと大人」だけでなく、ASPBの東京事務所とラオス事務所とCCC職員、あるいは古参メンバー、新人スタッフ、ボランティアと、活動に関わる様々な人々とのつながりのあり方を考えていく必要を感じました。訪問先の事務所の壁に、団体の使命、事業の自立に向けたプロセスを表した絵、「子どもをほめる100の言葉」な

ど、活動メンバーが共有すべきことが貼られていたのが印象的でした。

■CCCの子ども参加、自己表現と識字

ASPBが支援するCCCでは、活動の中で年長の子が下の子の世話をするという、そもそもラオス社会で日常的に行われているやり方で「担い手」となっているほか、絵本の昔話をもとに芝居を作ったり、森林伐採問題を訴える芝居を作って大人に披露するというラオスでは画期的なことが実現しています。

ただ、多くのCCCの職員にとって、図画工作や音楽などの講座は「子どもが楽しむため」という認識に留まっています。何かを実現、解決するために子ども自身が工夫し、創造力、表現力を発揮するための導きという意識は、まだまだです。

フィリピンでは、ストリート・チルドレンだった子どもが演劇を通じて自分を見つめ、表現する中で、本を読むということに関心が向き、今まで口にできなかった将来の夢を語るという変化が報告されています。ASPBの読書推進活動とCCCでの様々な講座は、密接につながり合うことを再認識しました。

ラオスでは、タイ、フィリピンほどに子どもの過酷な状況を目にすることはありませんが、ソーシャルワーカーなどの人材が非常に薄いことも事実です。子どもの出稼ぎ、性的搾取が国境を越えて行われる今日、周りの国の団体と連携して人材を育成しながら、子どもの問題に取り組んでいくことの重要性が増しています。

(今回の訪問は、JANIC/ユニセフ子ども支援NGO能力強化5カ年計画への参加によるものです。)

ボランティア 掲示板

「留学生と作って食べよう、ラオスの味」

ASPB初、
ボランティアが企画・実行

6月29日(土)、ラオス料理教室が開かれました。留学生のヴィエンシーさんが、巧みなトークで本場の味を伝授。22名の参加の皆さんは、見慣れない材料に戸惑いながらも、どんな料理ができるのかとワクワク。おいしくできあがったミーカティ(ココナツカレー・ヌードル)、ラープ(挽肉のハーブ和え)、ナムワンサリ(ラオス風おしるこ)に満足かつ満腹のひとときを過ごしました。

企画・実行ボランティア：久留雅美 荒絵理世 清水宏子 寺内由華 山本功子
講師：ヴィエンシー 講師アシスタント：ラー

座談会 ラオス料理教室をふりかえって

久留：ASPBで何かやりたいと日頃から思っていて、ピーマイパーティーの後、「料理教室なら私にもできる」と思って声をかけたんだ。

山本：企画してから1ヶ月でやってのけたのはすごい！！ 心配したのは、短期間で人が集まるかどうかだった。

久留：塩谷さんがネットの掲示板に書き込んでくれたり、いろんな人が協力してくれたよね。

ヴィ：ガス台や流しが少ないから、参加者全員でできなかった。

久留：こんなにたくさん来てくれるなら、もっと大きいところにすれば、予算にも余裕がでるし。今回はラオス料理が初めての人が多かったから、食べやすい物にしたけど、次はチャレンジメニューにするとか。

ヴィ：私はラオスの味を知ってもらいたい。タイ料理とは違う。例えばラオスでは料理に砂糖を入れない。

久留：参加したみなさん、ほとんど全員にうれしいと言ってもらえたのはうれしかった。ただ作り方が難しいっていう声があった。

ヴィ：ココナツミルクが固まってしまったり、とうもろこしと小豆の量の調整とか。

荒：これをきっかけにボランティアに参加する人は出たのかな？

山本：コトブキや麻布のイベントで活躍したり、興味をもってくれた人が多くいた！ ヴィエンシーさんは教えてみてどうでした？

ヴィ：味付けとかみんなにやってほしかった。でも、時間が足りなくてできなかったのが残念。次回は参加型でぜひやりたい。

荒：参加者が楽しくできるのか心配だったけど、それは不要だった。でももっとこうすれば、ということも色々あったので、もう一度やってみたい。

山本：当日の雰囲気がよかったから嬉しかった。新しいボランティアが増えたこともすごいし。反省点は料理教室だけでなく、ASPBの他のイベントにも生かせると思う。

久留：開催までこぎつけられるか不安だったけど、自分にもみんなにも思った以上に創造力があって、仕事の合間をぬってでもこれだけ出来るんだ、と自信になった気がする。今回は赤字が出ちゃったけど、改善点を生かしてまたやりましょう。

全員：そうですね！



イベント報告

■企業6社合同「ボランティア体験講座」

6月11日(火) 住友商事(株) 中部ブロック
1月24日に行われた6社合同イベントの第2弾。今回は名古屋在勤の社員の方々を対象に開催されました。ラオス語ってどんな言葉?と皆さんの関心は高く、53名の方が集まりました。チャンタソンよりラオスの教育状況とASPBの活動について講演を聞いた後、ラオス語翻訳貼りに挑戦。53冊のラオス語絵本が完成しました。主催: キリンビール(株)、住友商事(株)、大和証券グループ、東京三菱銀行、三井住友銀行、三菱商事(株)

■「ワールド・カルチャー・フェスティバル」

6月13日(木) キッコーマン(株) KCCホール
新橋のオフィスビルにアジア・アフリカ・中南米7ヶ国の屋台が集合! 会場では民族衣装のファッションショーや民族音楽も披露され、ASPBもラオス料理とバーシーの飾りでラオスを演出しました。このイベントは企業2社とNGO7団体による初の協働イベントで、関係者一同準備を重ねたものです。初の試みということで混乱もありましたが、来場者は230名と大盛況のうちに終了しました。

主催: アサヒビール(株)、キッコーマン(株)

■「留学生と作って食べよう、ラオスの味」

6月29日(土) ライフコミュニティ西馬込
詳しくはボランティア掲示板をご覧ください。

■「ラオス語絵本をつくってラオスの子どもたちに送ろう」

7月13日(土) 沖電気工業(株)
沖電気工業(株)の社員とご家族の皆さんを対象としたこのイベントも今年で3回目。初体験の人、連続参加の人、合計23名が参加し、まずはラオスクイズに挑戦。この後、ASPBより活動

内容の報告があり、皆で本場のラオスコーヒーを味わった後、ラオス語翻訳貼り作業を楽しみ、41冊のラオス語絵本ができあがりました。

■「ラオス・手織の美」

7月15日(月) ~ 20日(土)

(株)コトブキ DIセンター

(株)コトブキのご協力により、浜松町にある同社のショールームでラオスの伝統織物、装飾品と民族衣装を展示し、ラオス女性の自立を支援する「ホアイホン職業訓練センター」で織られた布、衣服などのラオスの手工芸品やコーヒーを販売しました。期間中は約270名がご来場下さいました。

20日(土)に行われたチャンタソンのカフェ&トーク「織物に込められた愛」には70名の方が参加し、ラオス女性たちの布に託した思いに耳を傾けていました。(写真)

このイベントによる6日間の売上は137万円でした。

ご協力: (株)コトブキ、(株)キャビン、小川藤男 後援: ラオス大使館



■「麻布十番納涼まつり・国際バザール」

8月23日(金) ~ 25日(日) 一の橋親水公園
夏のイベントといえば「麻布」。今年もASPBはラオス料理の屋台を出しました。また会場のステージではラオス留学生たちが伝統舞踊を披露し、お祭りの雰囲気盛り上げました。今年は調理場所が変更になったこともあり、例年以上



に念入りな準備が必要となりましたが、留学生延べ57名、ボランティア延べ68名が調理に、販売に協力しあって、3日間で売上げ149万円を上げることができました。(写真)

協賛: アサヒビール(株) 協力: シゲモニアル建設、十番ファーマシー薬局、千早正宏、大和証券グループ本社、三井住友銀行

各イベントの収益金はラオスの子どもたちのための活動資金として、また絵本は副読本として役立てられます。ボランティア等でご協力頂いた皆様、イベントにご参加いただいた皆様、本当にありがとうございました。

お知らせ

■ ASPB、平成14年度外務大臣表彰を受賞

ASPBは本年度の外務大臣表彰を受賞しました。20年にわたる国際協力の分野での実績が評価されたものです。7月16日に授賞式が行われ、川口外務大臣から表彰状が手渡されました。

■ ラオスの紙芝居、手づくり紙芝居コンクールで特別賞を受賞

7月に大阪府箕面市で開催された「第12回箕面手づくり紙芝居コンクール」にラオスの紙芝居5点を応募、うちブンルート作「尺とり虫ちゃん」が市議会議長賞を受賞しました。応募した作品はいずれも、本年2月にラオスで開催された「紙芝居づくりセミナー」で受講者たちが作った作品を、コンクール用に仕上げたものです。セミナーの成果が日本で発揮されたといえましょう。

■ 東京事務所の動き

6月

- 11日 6社合同「ボランティア体験講座」(チャンタソン)
- 13日 ワールド・カルチャー・フェスティバル
- 14日～20日 ラオス出張(チャンタソン)
- 19日 半田市成岩中学校訪問受入れ

7月

- 6日 箕面手づくり紙芝居コンクール第二次審査(チャンタソン)
- 8日 国際ボランティア貯金寄附金配分決定通知式(野口)
- 13日 沖電気工業(株)「ラオス語絵本をつくってラオスの子どもたちに送ろう」(野口)
- 13日 箕面手づくり紙芝居コンクール最終審査(チャンタソン)
- 15日～20日 「ラオス・手織の美」
- 16日 「外務大臣表彰」受賞式(チャンタソン、森)
- 30日～8月12日 JANIC/ユニセフ子ども支援NGO能力強化海外研修(タイ・フィリピン)(森)

8月

- 23日～25日 「麻布十番納涼まつり・国際バザール」

■ ラオス事務所

6月

- 1日 「子どもの日」行事に参加
- 17日 ラオスでの事業に関するMOU(了解書)締結
- 18日 CCC(子ども文化センター)館長会議
- 19日 TTC(教員養成学校)読書推進テキスト作成委員会

7月

- 16日 TTC読書推進テキスト作成委員会
- 24日 TTC読書推進テキスト作成委員会

8月

- 4日～10日 紙芝居づくりセミナー(チャンパサック県)(PADETCと共催)
- 11日～17日 学校図書室(HA)開設
- 19日～23日 TTCでの読書推進指導者養成セミナー

■ 学校図書室開設状況

6月

- 4日 サイヤブリ県トーンカット小学校
- 5日 サイヤブリ県シェンホーン中学高等学校
- 6日 サイヤブリ県ナーコック小学校

8月

- 12日 サワンナケート県ヴェンホンカム小学校
- 13日 サワンナケート県アッサポーン中学高等学校
- 14日 サワンナケート県少数民族中学高等学校
- 16日 チャンパサック県少数民族中学高等学校

開設支援: キヤノン(株)、(財)ベルマーク教育助成財団、若林地所(株)